

〔地錦抄八〕草木植作様之卷〇中  
略

一草木種蒔に、毎月の節の日まくべからず、曆に節と有ル日なり、耕作には節蒔とて大にきらふ事なり、接木指木も無用成べし。

## 〔草木育種上〕接法の事并圖

按に農政全書に、接様又審なり、本邦に接様色々あり、其木によりて時節のよき時接べし、何も九焦、南風、天火、地火の日を忌べし、先その接砧の木は三四歳より六七歳までの木は勢よし、又四五年といへどもこせたる木は惡し、十歳餘の木にても勢よきは又接べし、大樹へ接ときは枝の勢よき所を残外の枝は皆截すて、その殘たる枝へ接なり、是を高つきと云、又砧樹を抜て接時は、長き根を切はさむがよし、又切過はいたむもの也、接梢の事は、去年のびたるほを今年接なり、ほは長くのびて勢よく、肥たる所を切とりて接なり、又弱木は接たるほの枯ぬやうにすべし薬にてかこひ、又土藏などへ入置なり、風を忌べし、又接て跡にて臺の切口と穗の切口へ、蠟或は墨を塗ことよし、

接又根接とも云、則だいつぎなり、仕様は先ほを大根の切口へさし、或は水にいけ置砧樹をきり、其切口の鋸めを小刀にてけづり、人行こと四五町程間を置いて接べし、但し木口に水けなき木は、直に接てよし、その砧の木口の方より、木の心と皮との間を、堅に小刀にて一寸程、けづる様にへぐなり、尤へぐに甚かげんあり、木によりて皮の厚きものあり、薄きものあり、又大木は厚く、小木は薄し、若薄き皮を厚くけづりて、木の玄んに小刀かゝる時はつかず、其時は接口を替てけづり直すべし、扱ほに眼を二ツ三ツかけて、二寸餘にきり、片々の皮を心にかからぬやうに堅にけづり、口へ含むべし、砧のへぎめ一寸なれば、ほは一寸一分ほどにけづるなり、外の方の皮より